

733年に成立した『出雲国風土記』は、写本そして版本として現代にまで伝えられています。奈良時代に元明天皇の詔によって全国66ヶ国で書かれた風土記は、現代まで残っているのは五つだけで、ほぼ完本とされるのは『出雲国風土記』だけです。現存する写本のほとんどは1634年に徳川義直が日御碕神社に寄進した写本をルーツとしています。松江藩士の岸崎時照は1683年に『出雲風土記抄』をまとめましたが、その際に元にしたのは、出雲大社寛文の大造営の参考資料として伊勢から取り寄せた写本でした。出雲国内ではその後もあまり注目されず、1797年に千家俊信が『訂正出雲風土記』を著したときも参考とされたのは、遠江の内山真龍の『出雲風土記解』でした。出雲では千家俊信以降に風土記研究が盛んとなりますが、そのきっかけとなったのは東海の人々によって書写されてきた写本だったのです。

家康によって列島内に安定政権が成立すると、武威を誇りとしていた武士の活躍の場は、文官たちにとって代われ、儒学を中心とした漢籍の知識が競われました。そんな社会の流れの中で、自らの遠い祖先たちの業績を掘り起こし、見直して称えようとする人



たちが現れて国学が発展しました。この機運の中で本居宣長は『古事記』を研究し、『古事記伝』にまとめました。宣長には「松阪の一夜」のエピソードで有名な賀茂真淵との出会いがあり、真淵は荷田春満に師事していました。宣長没後の門人と自称した平田篤胤を含めて国学の四大人と呼ばれた人たちが、国学研究の貴重な資料として『出雲国風土記』を書写していったのです。さらには彼らの門人たちが写本を伝え広げたことで、『出雲国風土記』が研究されたと言えるでしょう。

賀茂真淵の門人だった内山真龍は、同行者5人とともに実際に出雲を訪れ国の形を見回って、『出雲日記』という旅日記に著し、同行者の高林方朗も『弥久毛乃道中』を書き残しています。出雲を踏査中の彼らはどんなことを感じたでしょう。千年も昔に書かれた文献に記された名前と同じ山や川、地名や神社が目の前に存在していることに、不思議さや高揚感でワクワクしっぱなしだったのではないのでしょうか。千年前の資料に書かれた名前の神社に何代も引き継がれた宮司の末裔と、今、会話している不思議な感覚を覚えたのではないのでしょうか。現代風に言えばSF映画の主人公になってしまったような気分でしょう。

『弥久毛乃道中』には風土記の奥書の一部が書き記されています。日御碕神社本の奥書として書かれた部分に、寄進者として「家直」と書かれています。寄進者は「義直」が正しいのですが、現存する写本の中には同じように「家直」と書かれたものもあります。神魂神社にも写本があり、そこには「家直」となっていて、彼らの写本とは異なっていたので、書き記したのかも知れません。ご存知のように、神魂神社は出雲国風土記には記載がなく、平安時代の延喜式にも載っていないので創建年代が定かではありません。真龍らと語った神職は、自身が奉職する社についてどのような話しをしたのでしょうか。

内山真龍らの出雲踏査順路



寛文の頃、吉田神道が全国の神社支配を目論んで「諸社祢宜神主法度」が發布されますが、出雲大社は朝廷から得た「永宣旨」をよりどころとして出雲内の吉田支配を退けます。しかし元禄には、島根・秋鹿両郡の紛争に際し、出雲大社は佐陀神社との争論に破れて処罰を受けてしまいます。このことが風土記研究の機運を冷ましてしまったのかもしれませんが。